



J-STAGEニュース

No.50

CONTENTS:

Jxivははじめました！！Twitterも運営中。よろしく。……………	1
J-STAGE Dataを有効に活用した研究データ公開の事例……………	2
2021年度 ジャーナルコンサル開催報告……………	5
ジャーナルの魅力発信は資料ページから ～サイト編集ツールをご活用ください～……………	8

【お詫びと訂正】

2021年9月17日発行J-STAGEニュースNo.46、5ページに掲載の「図2 資料独自の画像の設定例と変更方法」のなかで、誤りがございました。「画像形式: PNG」が、「画像形式: JPG / PNG / GIFのいずれか」となっておりました。したがって、図中のオレンジ色背景色内の説明文「画像形式: JPG / PNG / GIFのいずれか」を削除し、「画像形式: PNG」へ変更したことを報告いたします。記事に不備がございましたこと、ここに深くお詫びを申し上げます。訂正をさせていただきます。(J-STAGEニュース編集担当)

Jxivははじめました！！

[Twitter @Jxiv_jst](https://twitter.com/Jxiv_jst)  も運営中。よろしく。

©2022 Japan Science and Technology Agency
<https://doi.org/10.34344/jstageews.2022.50.1>



■J-STAGEニュースNo.49にてお知らせいたしました
Jxiv (ジェイカイク / じえいかにく) を2022年3月24日にリ
リースいたしました。

<https://jxiv.jst.go.jp/index.php/jxiv/index>

まだ公開数が少ないながらも、自然科学・人文科学・社会科学、学際科学に関する英語論文や日本語論文が並んでいます。Jxivに公開されたプレプリント第一号は、沖縄県におけるSARS-CoV2 (COVID-19)検査についての論文です。また、日本のコミュニティならではの日本特有の論文も公開されています。例えば、ハンセン病療養所における天文観測の論文や、識字率に関する論文などがあります。

リリース直後の早い段階でJxivにご投稿いただいた統計数理研究所数理・推論研究系准教授、坂田綾香先生と筑波大学生存ダイナミクス研究センター教授、丹羽隆介先生に、Jxivにご投稿頂いた経緯やJxivの今後についてのご意見などを、それぞれお話を伺いました。

■Jxivを検索すれば日本語論文に出会えるシステムの構築を目指したら？

坂田綾香先生 (統計数理研究所数理・推論研究系准教授)



坂田綾香先生

(JST)
Jxivがリリースされたことをどのように知りましたか？

(坂田先生)
さきがけの領域会議にてJxivの説明会があり、そこでJxivのことを知りました。私が研究に携わる情報科学分野では、基本的に英語で論文を書きます。そして英語の論文は通常arXiv^(注1)に投稿して公開しますので、Jxivに英語

の論文を投稿する機会はないと思いました。でもJxivは日本語にも対応していると聞き、ちょうど日本語の論文を準備していたので、早速投稿してみました。

(JST)

Jxivが日本語対応しているから投稿して頂けたんですね。(坂田先生)

情報科学分野のほとんどの英語の論文がarXivに投稿・公開されていますので、英語の文献を検索したいと思ったら、arXivの検索機能を利用すれば目的の論文に出会えます。一方で、日本語の論文を検索しようとしても、日本語論文は特定のサーバに集約されていないため散逸して見つからないことがあります。例えば情報科学系の国内の会議では、数ページ程度の日本語の会議録を提出することがあります。こういった会議録などを集約する場所としてJxivをうまく活用すれば、日本語論文を容易に検索できるようになり、研究活動にプラスになるのではと思っています。

(JST)

なるほど、ありがとうございます。情報分野だけでなく様々な分野で、Jxivを日本語論文集約の場として活用できるようになると良いですね。

Jxivが改善する方が良いと思われる点があればお聞かせください。

(坂田先生)

投稿したらJxivの担当者からメールが来たのでびっくりしました。私が利用しているarXivは投稿の不備をシステムが自動で検知して弾きますので、Jxivの中には人がいるんだという感じで新鮮な経験でした。今後、投稿論文数が増えたときの作業量が大変になるかとも思いました。また、競争の激しい分野ですと、どちらが先に論文を投稿公開したという証明を争う時もあり、担当者とのやりとりを介するJxivはそのような証明を早く得るといった目的は向いていないかもしれないと感じました。

(JST)

貴重なご意見をいただきましてどうもありがとうございます。

Jxivが国内研究者のための日本語論文ライブラリーとなることを目標にしたいです。

■国内ジャーナルの投稿システム上にJxiv投稿ボタンを作成し、Jxivの認知度を上げ投稿数を増やせないか？

丹羽隆介先生（筑波大学生存ダイナミクス研究センター教授）

（JST）

Jxivがリリースされたことをどこで知りましたか？

（丹羽先生）

フォローしている研究者のツイッターでJxivというものがリリースされたことを知り、興味を持ちました。基礎生物学の分野では日本語の論文はほとんど書かないので、英語論文をJxivに投稿することを考えました。

（JST）

そして実際にJxivに投稿して頂きました。

（丹羽先生）

Jxivに論文を公開した場合の論文へのアクセス数や認知度などの使い勝手や様子を見てみたくて、ちょうどbioRxiv^(注2)に公開しようと思っていた論文があったので、投稿してみました。投稿前に共著者に、この論文を日本産のサーバであるJxivに投稿してみても良いかと聞きました。私以外の共著者9人でJxivを知っている人は誰もいなかったのですが、特に反対意見はなかったので投稿しました。現在Jxivで公開した論文のダウンロード数が100程度（公開後約20日時点）で、この論文をbioRxivに公開していたらもう少しダウンロード数があるだろうという感覚はしています。

（JST）

Jxivをご利用されたご感想をお聞かせください。

（丹羽先生）

生命科学系のジャーナルには、投稿システム上のオプションとして「bioRxivに投稿しますか？」というボタンが用意されているジャーナルがあります。今回Jxivに投稿するにあたって、私が投稿先に選んだジャーナルのシステムにはJxivを選択できるボタンはありませんので、「bioRxivに投稿せずに日本が最近作ったJxivに投稿しても良いか」についてEditorial Officeに確認する必要がありました。Editorial Officeからは「プレプリントサーバはどこでも良いので好きにしてほしい」との連絡をもらいました。生物系ではbioRxivが世界中の研究者に広く受け入れられていますので、それを超えてJxivを選択しようとする研究者は多くはないだろうと思います。

せっかくの日本産のプレプリントサーバなので、日本の学会のジャーナルは投稿システム上にプレプリントサーバの第一選択肢をJxivとして、「Jxivに投稿しますか？」と見せれば、認知度が上がり、利用も増えるのではと想像します。

（JST）



丹羽隆介先生

なるほど、ありがとうございます。国内の学会にご協力いただくのですね。

（丹羽先生）

海外の研究者は日本のサーバだから閲覧してみようということにはならず、やはりそのサーバに文献数が多いから閲覧すると思いますので、現時点で世界的に宣伝してもうまく行かないのではと思います。国内学会と連携をして、まずは投稿数公開数を増やして、それから世界にアピールするのだと思います。だから、国内の研究者に対して、いかにJxivを使いやすくするかが重要になってくると思います。

（JST）

貴重なご意見をいただきましてどうもありがとうございました。

世界に認められるサーバとなれるよう、まずは国内の学会と連携をして着実な足固めをしていきたいと思っています。

^(注1) arXiv：1991年にスタートした物理学・数学などの分野のプレプリントサーバ。プレプリントサーバの中で最も歴史が長い。現在アメリカのコーネル大学図書館が運営している。

^(注2) bioRxiv：2013年に開始した生物学分野のプレプリントサーバ。アメリカのコールドスプリングハーバー研究所が運営している。

Jxivが研究者が使いやすいサーバとするためには、まずは国内の学会と連携をしてJxivの投稿数を増やすことが重要というご意見をおふたりの先生方から頂きました。

J-STAGE上でジャーナルを発行している利用機関のみならずには、是非投稿規定にプレプリントにて公開した論文の投稿を受け付ける旨の記載を行って頂きたいと思っています。海外ではジャーナルがプレプリントと連携をする動きが盛んです。一人でも多くの研究者のみならずJxivを知って頂き、興味を持って投稿して頂きたいと思っています。そして日本のサイエンスの発展のために、Jxivをご活用頂けますと幸いです。

■Jxivとは

JxivはJSTが運用している日本初の本格的なプレプリントサーバです。日本語あるいは英語による研究論文のプレプリントを公開しています。対象分野は、自然科学、人文学、社会科学、そして既存の枠組みを超えた学際科学も対応しています。「プレプリント」とはジャーナルに投稿する前、あるいは、ジャーナルに投稿ののち査読結果を受けて改訂する前の、論文の原稿を指します。プレプリントをジャーナルに先立っていち早く公開することで、先取権を獲得し、そしてご自身の研究成果を国内外に積極的にアピールすることが可能となります。丹羽先生がインタビューにてご指摘下さいました「Jxivに投稿します」ボタン等につきましては、現在Jxiv投稿システムとジャーナルの連携機能について検討中です。

©2022 Japan Science and Technology Agency
<https://doi.org/10.34344/stagenews.2022.50.2>



J-STAGE Dataを有効に活用した研究データ公開の事例

■はじめに

J-STAGE Dataは、J-STAGE登録誌のためのデータリポジトリです。論文に付随する研究データについて、DOIを付与しオープンアクセスで公開します。2020年3月にリリース、2022年6月末現在、25のジャーナルから362の研究データを公開しています。

これまで論文に付随する研究データの公開というと、Supplementary Information（J-STAGEでは「電子付録」と呼びます）としての公開が主でした。J-STAGEから公開された論文には、電子付録としてPDF形式やExcel形式の研究データを公開することが可能です。ただし、これはあくまで論

文の一部としての流通にかぎられるほか、データの大きさや形式に制限があるなどの欠点もあります。その点、J-STAGE Dataはデータ容量の大きな研究データ、また、さまざまなデータ形式の研究データを公開することができるため、その特長を生かした研究データの公開が可能になっています。

また、研究データをJ-STAGE Dataから公開することによりとくに可能になる点として、オープンサイエンスに資するような研究データの公開があります。研究データの公開が求められる背景としては、いくつかの要素があります。そのひとつには、近年の研究不正の顕在化などから研究の透明性が強く求められるようになり、そのことから研究の根拠となるデータの公

開が必須になりつつあることがあげられます。また、公的資金を原資として進められた研究成果、とくに論文の根拠となるデータについては、これをひろく一般に公開することが義務化されるケースも増えてきました。そしてさらに、研究の進展・加速化というなかから、オープンアクセスで公開された研究データを二次利用する、とくに大量のデータを再利用・再解析することで新たな知見を見いだそうとするデータ駆動型研究が、研究の新たなストラテジーとして大きなウェイトをしめつつあります。自身の産出した研究データにかぎらず、複数の独立した研究から得られたデータを統合し新たな視点から解析することで、これまでになかった知見が得られる可能性があるのです。そして、そのためには、研究データ自体が第三者にとって価値の高いものであるだけでなく、第三者にとって使いやすいものである必要があります。たとえば、メタデータの充実・構造化、データ形式の汎用性、そしてFAIR原則への準拠、そういったことも、オープンサイエンスへの寄与という観点からは重要です。J-STAGE Dataのサービス開始からしばらく、そういったオープンサイエンスに資するような研究データの公開はあまり多くありませんでしたが、最近になり、J-STAGE Data利用機関、および、実際にJ-STAGE Dataからデータを公開する研究者において研究データ公開への理解が深まってきたことなどもあって、そういった第三者により二次利用されやすい研究データの公開も散見されるようになってきました。

ここでは、J-STAGE Dataの特長を強く生かした研究データ公開の例、なかでもとくに、オープンサイエンスに資するような研究データの公開について、具体的な例を紹介していきます。

■日本気象学会「気象集誌」

日本気象学会の英文誌「*Journal of the Meteorological Society of Japan* (気象集誌)」は、J-STAGE Dataをサービス開始の直後から利用しています。気象学という研究分野の特徴として、データ容量の大きい研究データを扱うこと、また、研究データの共有が進んでいることがあげられます。

ここでは、J-STAGE Dataから、地球レベルでの高解像度の大気モデルのシミュレーション結果を公開した例を紹介します (<https://doi.org/10.34474/data.jmsj.16616554>)。この研究データは3 GB前後もあるファイル16個からなり、合計で43.75 GBという巨大なものです。これは、大容量のデータを公開することが可能なJ-STAGE Dataの特長を生かしたものと いえます。この研究データに基づき詳述しているJ-STAGEに掲載された論文 (<https://doi.org/10.2151/jmsj.2021-066>) では、このシミュレーションの結果と人工衛星による観測の結果とを比較しています。研究データが公開されていることにより解析あるいは結論の信頼性が担保されるだけでなく、第三者がそれを再利用することも可能になっています。非常な労力および費用をかけて得られた貴重な研究データが、データ産生者のみの利用にとどまるのではなく、それを誰でも自由に利用できて、まったく別の視点から新たな知見が生み出される、そういったデータの循環、知の産生につながるような研究データ公開の好例といえます。

■日本生物物理学会「*Biophysics and Physicobiology*」誌

日本生物物理学会の「*Biophysics and Physicobiology*」誌も、J-STAGE Dataを積極的に利用しているジャーナルのひとつです。2020年度 第3回J-STAGEセミナーでの編集委員長による講演では、J-STAGE Dataから公開していきたい研究データとして、1) データの正確性を判断できるような生の実験データ、2) ネガティブデータを含めた詳細な研究データ、3) 論文の結果を再現できるよう研究方法の詳細、の3つがあげられていました。

J-STAGE Dataからの研究データの公開例として、タンパク質分子の運動のシミュレーション結果をとりあげます (<https://doi.org/10.34600/data.biophysico.13352375>)。この

データセットは標準的に使用されているビューワーにより可視化することが可能で、閲覧者がこのシミュレーションを自ら再現することが可能になっています。そのことにより、J-STAGEに掲載された論文 (<https://doi.org/10.2142/biophysico.BSJ-2020013>) の信頼性また説得力は、いっそう増しているものと考えられます。

■日本質量分析学会「*Mass Spectrometry*」誌

日本質量分析学会の「*Mass Spectrometry*」誌からJ-STAGE Dataに公開された研究データを紹介します (<https://doi.org/10.50893/data.massspectrometry.19446803>)。質量分析とは、分子をイオン化して真空中で加速し電場や磁場によって分離・検出する分析手法です。それにより観測されるデータが質量スペクトルで、通常、グラフにプロットされて示され (図1)、J-STAGEに掲載された論文 (<https://doi.org/10.5702/massspectrometry.A0103>) でも、いくつかの質量スペクトルがグラフとして示されています。それに対し、J-STAGE Dataからは、質量スペクトルの観測数値、いわゆる生データが公開されています。閲覧者は、この生データからビューワーを使って質量スペクトルを自在に可視化することができます。「*Mass Spectrometry*」誌の推奨するビューワーはジャーナルのウェブサイトから自由にダウンロードできますし、そのほか好みのビューワーを使うこともできます。また、この質量スペクトルをみるだけではなく、生データをダウンロードして、たとえば自分で作成したデータベースに追加したりすることも可能です。

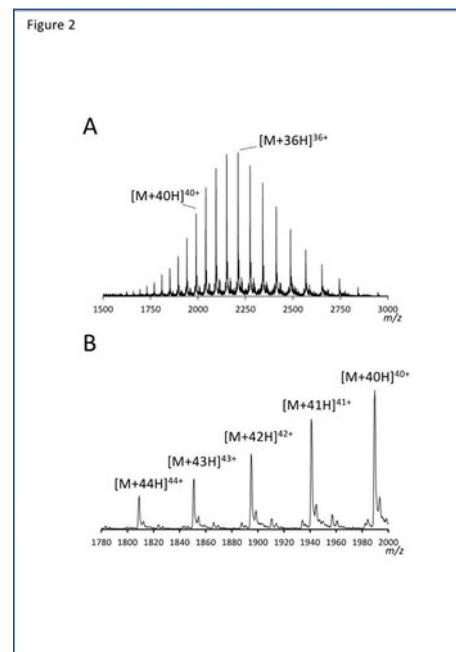


図1 質量スペクトルのグラフとしての表示の例。© 2022 Yoshinao Wada and Nobuhiko Okamoto. Licensed under CC BY-NC-ND 4.0. <https://doi.org/10.50893/data.massspectrometry.19446803.v1>

■日本蜘蛛学会「Acta Arachnologica」誌

日本蜘蛛学会の「Acta Arachnologica」誌では、J-STAGE Dataの利用開始を機に、新たに“Video Article”というカテゴリを新設しました。動画をメインとした論文です。J-STAGEに掲載されたこのカテゴリ最初の論文 (<https://doi.org/10.2476/asjaa.70.131>) では、いくつかのクモの行動を動画で示しており、約4分間、約300 MBとややデータ容量の大きい動画 (図2) をJ-STAGE Dataから公開しています (<https://doi.org/10.50997/data.asjaa.17139701>)。



図2 J-STAGE Dataから公開されたクモの生態を示す動画。
Licensed under CC BY-NC-ND 4.0. Nagayama, Shojiro; Takasuka, Keizo (2021). <https://doi.org/10.50997/data.asjaa.17139701.v1>

動画なので、クモの動きがまさに一目瞭然です。こういった生物の行動にかぎらず、動画を利用しないと表現のできないもの、あるいは、動画を利用することによって理解の深まることは、研究分野をかぎらずさまざまな論文にてあるかと思えます。最近では、この“Video Article”といった動画の公開に特化したカテゴリにかぎらず、動画を付した論文はさまざまな研究分野で増えているようです。動画は短いものでもデータ容量を食うため、データ容量の制限のないJ-STAGE Dataの利用は非常に有効だと思われます。

■東北地理学会「季刊地理学」誌

ここまで、自然科学系のジャーナルでのJ-STAGE Dataの利用例をみてきましたが、人文科学系あるいは社会科学系のジャーナルでもJ-STAGE Dataの利用は広がってきています。

東北地理学会の「季刊地理学」誌では、メディアに対するアンケート調査の結果をJ-STAGE Dataから公開しています (<https://doi.org/10.51022/data.tga.19342553>)。J-STAGEに掲載された論文 (<https://doi.org/10.5190/tga.73.3.178>) では、それを整理して代表的な回答だけを記載しています。このような貴重かつ労力をかけて得られたアンケート調査の結果は、通常だとそのまま死蔵されてしまいますが、このようにJ-STAGE Dataから公開することによって、閲覧者は生の結果をみることができ、あるいは、第三者がその結果を再利用することも可能になります。

■おわりに

以上、J-STAGE Dataの特長を強く生かした研究データの公開、とくにオープンサイエンスに資するような例を、いくつかのジャーナルについて紹介しました。J-STAGE Dataの利用方法、また、具体的な運用方法はジャーナルごとに多少とも異なり、さらに、研究データの公開に対する考え方もジャーナルごと、とくに研究分野ごとに違いがあります。ここで紹介した研究データの公開例を参考に、それぞれのジャーナルごとにJ-STAGE Dataの特長を生かして研究データ公開を推進し、さらにそれらデータの二次利用が進むことにより、研究データの公開による新たな研究の地平が開かれることを強く期待しています。

J-STAGE Dataは随時、J-STAGE利用機関からの利用申し込みを受け付けています。研究データの公開に多少ともご関心があるなら、J-STAGE Dataからの研究データの公開についてぜひとも検討いただきたいと考えています。毎月、J-STAGE利用機関をひろく対象としたJ-STAGE Data「説明会」を開催しているほか、J-STAGE利用機関に対して個別に、とくに編集委員長や編集委員を対象としてJ-STAGE Dataについてくわしく説明し質問に答える「意見交換会」を開催しています。この「意見交換会」はJ-STAGE利用機関の都合にあわせて開催しており、J-STAGE Dataの利用申し込みを前提にせずとも話を聞くだけでも大歓迎です。

少しでもご興味があったら、ぜひ
data-contact@jstage.jst.go.jpあてに連絡ください。

2021年度 ジャーナルコンサル開催報告



J-STAGEは、登載誌の質を向上し国際発信力を強化することを目的として、ジャーナル出版の国際動向に詳しいコンサルタントによるジャーナルの改善支援「ジャーナルコンサルティング（以下、本プロジェクト）」を2017年度より実施しています。

■2021年度の実施概要

2021年度は英文誌12誌、和文誌8誌を対象（図1を参照）にコンサルティングを実施しました。英文誌へのコンサルティングはJSTが契約したコンサルタントが行い（言語：英語）、和文誌へのコンサルティングはコンサルタントが英文誌に提供したコンテンツをJSTが和訳して提供し、JSTがコンサルティングを行いました（言語：日本語）。

英文誌	
• Geochemical Journal（日本地球化学会）	
• Annals of Clinical Epidemiology（日本臨床疫学会）	
• The Horticulture Journal（園芸学会）	
• Breeding Science（日本育種学会）	
• Niigata Journal of Health and Welfare（新潟医療福祉学会）	
• Fujita Medical Journal（藤田医科大学医学会）	
• International Journal of Affective Engineering（日本感性工学会）	
• International Review for Spatial Planning and Sustainable Development（空間計画と持続可能な開発国際学会）	
• Tribology Online（日本トライボロジー学会）	
• Angioscopy（日本心臓血管内視鏡学会）	
• Transactions of the Japan Society for Aeronautical and Space Sciences（日本航空宇宙学会）	
• Health Emergency and Disaster Nursing（災害看護推進会）	
和文誌	
• 日本健康開発雑誌（日本健康開発財団）	• 国際P2M学会誌（国際P2M学会）
• 日本機械学会論文集（日本機械学会）	• Journal of MMIJ（資源・素材学会）
• 日本小児腎臓病学会雑誌（日本小児腎臓病学会）	• 日本栄養・食糧学会誌（日本栄養・食糧学会）
• マーケティングジャーナル（日本マーケティング学会）	• 次世代移動体技術誌（日本UAS産業振興協議会）

図1 ジャーナルコンサルティング採択誌（2021年）

2020年度までは、多くの登載誌の共通課題である投稿規程等のドキュメント類の改善等、ジャーナルの基盤となる部分の整備やJ-STAGEで推進しているオープンアクセス（OA）化を中心に進めてきました。2021年度、英文誌向けには、これらの基盤改善にとどまらず、参加誌の状況に応じて多様なコンサルティングを提供できるよう、8つのコース（図2を参照）を設け実施しました。

コース名	実施数 (1コース目)	実施数 (2コース目)
①投稿規程の改訂	9	
②運営戦略と分析を伴ったOAへの転換	2	
③新規OAジャーナルの創刊		
④データポリシーの評価		
⑤編集委員会の発展(国際化)		
⑥ジャーナルインパクトファクター(JIF)取得要件への準拠	1	2
⑦PMC掲載要件への準拠		1
⑧投稿数の増加		3

図2 ジャーナルコンサルティング提供コースと実施状況

和文誌向けには、コンサルタントのノウハウを参考に、DOAJ（※）収載要件への準拠を目安として、OA化、データ公開、プレプリント、研究倫理等、現在の投稿規程に求められる内容への改訂を支援しました。具体的な実施スケジュールは図3のとおりです。

■ジャーナルの課題と改善活動

本プロジェクトにおいては、はじめに現状診断をおこない各ジャーナルの改善すべき課題を明確にします。このジャーナル診断の結果、大半の参加誌で投稿規程に必要な内容の欠如あるいは不十分な記載が見られたため、多くのジャーナルは『①投稿規程改訂』コースに取り組むこととなりました。また、OA化によるジャーナルの財務構造への影響が大きいと予想される参加誌は、こうしたドキュメント類の改善に加え、持続可能なOA誌とするため、ジャーナル運営の財務分析やOAモデルをシミュレーションする『②運営戦略と分析を伴ったOAへの転換』コースに取り組みました。そして、ドキュメント類やジャーナルWEBサイト等のジャーナル基盤が十分整備されていると診断された参加誌は、目標として掲げる『⑥ジャーナルインパクトファクター（JIF）取得要件への準拠』コースを実施しました。その他、『①投稿規程改訂』を順調に短期間で完了できたジャーナルは、課題や希望に応じて『PMC収載要件への準拠』や『投稿数の増加』コースに続けて取り組みました。（各コースの実施状況は図2を参照）

■実施コースのコンサルティング内容の概要

『①投稿規程改訂』

現在の国際標準に則した投稿規程案を対象ジャーナル用にカスタマイズして提供。関係する著作権関係、その他ジャーナルポリシーに関して助言を与える

『②運営戦略と分析を伴ったOAへの転換』

持続可能なOA誌への転換のため、ジャーナル運営に係る財務分析を提供し、想定されるOAモデルのシミュレーションを提示、出版方針決定を支援

『⑥JIF取得要件への準拠』

取得要件（品質とインパクトの基準）について解説。品質とインパクトを測る様々な指標についての現状分析とそれらを向上させるためのアクションアイテム例の提示

『⑦PMC収載要件への準拠』

PMC収載ジャーナルの選定基準について解説。基準に対する現状分析の提示

『⑧投稿数の増加』

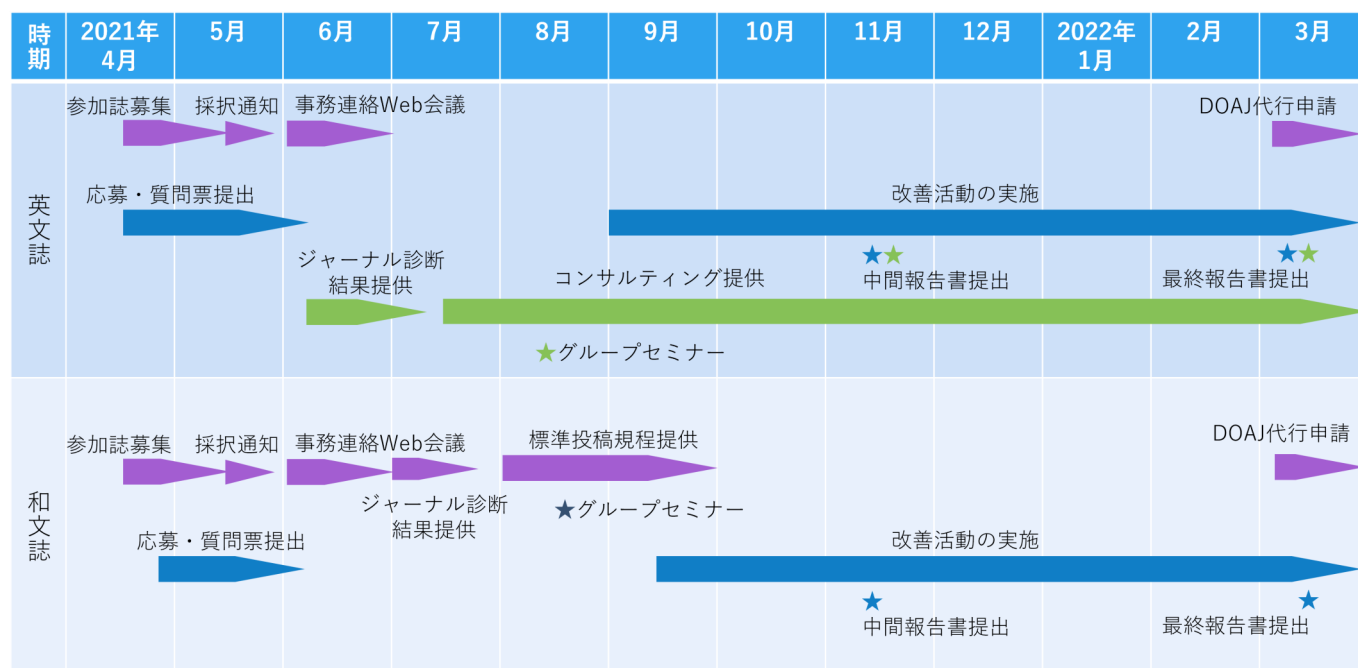
著者に投稿を促す要因について解説。それぞれの要因に関して具体的なアクションアイテム例を提示

■まとめ

上記のように基盤改善にとどまらず、多様なコンサルティングを提供し、ジャーナル個別の状況に応じた課題解決を支援するという2021年度プロジェクトの当初の目的は概ね達成ができたと考えています。一方で、ほとんどの参加誌で投稿規程改訂が必要との診断を受けたことから、依然ジャーナルの基盤改善が必要とされるJ-STAGE登載誌は英文誌、和文誌問わずかなりの割合で存在するに思われます。これを受け、2022年度も前年度のモデル継続を基本とし、OA誌のマーケティング計画策定を支援するコースを新設するなど、更なる充実を図りつつ、基盤改善をより多くの登載誌に広げ、加速させることのできる施策の検討を進める予定です。ジャーナルコンサルティングやミニセミナーにご参加いただいた発行機関が、そのノウハウを活かして、自ら改善を進められるような事例も少しずつ見受けられるようになっており、このような取り組みを広く波及できればと考えております。

J-STAGEは今後も発行機関との連携を深め、本プロジェクトを通じて登載誌の国際発信力強化の一助となるよう努めてまいります。

※DOAJ (Directory of Open Access Journals) …国際的な基準を満たす高品質の OA ジャーナル及びその記事のメタデータを、言語や地域、分野を問わず収載するオンライン・ディレクトリ・サービス。収載誌の認知度、アクセシビリティ、評判、利用を高めることを目的として、Infrastructure Services for Open Access (IS4OA)により運営されています。



凡例：■…JST ■…コンサルティング参加誌 ■…コンサルタント

図3 ジャーナルコンサルティング実施スケジュール

ジャーナルの魅力発信は資料ページから

©2022 Japan Science and Technology Agency
<https://doi.org/10.34344/stagenews.2022.50.4>

～サイト編集ツールをご活用ください～



年々増加するJ-STAGE掲載誌へのアクセス。その中でも、「資料トップ」や「この資料について」などの記事以外のページへのアクセスは全体の13.5%を占めています※。これらのページは初期状態では最低限の情報しか掲載されませんが、「サイト編集ツール」を利用することで、様々な関連情報を追加し、ジャーナルをより魅力的で信用のあるものとして閲覧者に印象づけることができます。

これまでJ-STAGEで実施してきたジャーナルコンサルティ

ングにおいても、公開情報が乏しいと信頼性の低いジャーナルと判断されるおそれがあるため、資料の紹介を充実させ、オープンかつ精力的な出版活動を行っていることをアピールするのが重要であると言われています。貴誌の魅力発信の一助として、サイト編集ツールを是非ご活用ください。

※「資料トップ」「巻号一覧」「この資料について」などを「資料ページ」、各記事の書誌画面、PDF、全文HTML画面を「記事ページ」として、J-STAGE全登録誌を対象に、令和3年4月～令和4年3月における（資料ページへのアクセス数）÷（資料ページへのアクセス数+記事ページへのアクセス数）を算出。

サイト編集ツールの起動方法

J-STAGE編集登録システムへログインして「サービス管理」>「サイト編集：サイト編集（資料個別）」をクリックし、編集対象の資料を選択してください。

カスタマイズ可能な項目（主なものを抜粋）

☆「資料トップ」「この資料について」共通のカスタマイズ項目

- ヘッダーカラー：ヘッダーの色は初期状態では青が指定されていますが、全12色の中から資料のイメージに合った色を選択できます。
- Journal Impact Factor (JIF)：JIFを取得している資料の場合、対象年と数値を入力することでヘッダーに表示できます。
- 資料カバー画像：初期状態ではJ-STAGEロゴのダミー画像が設定されています。資料にカバー画像（表紙）がある場合、ヘッダーに表示させることができます。
 ※資料カバー画像の設定は、サイト編集ツールではなく「サービス管理」>「資料情報管理：資料一覧」の画面にて行いますのでご注意ください
- 投稿案内：論文の投稿ページや投稿規程などへのリンクを表示できます。
- 関連資料：学会の大会予稿集など、当該資料に関連する資料を表示できます。
 ※前身誌および後続誌については、それらがJ-STAGEに登録されている場合、自動的に情報が取得・表示されますので登録作業は不要です
- 発行機関からのお知らせ：画面右側のコラムには表1に示す内容を掲示できます。

	利用例
テキスト	次号発行予定などのお知らせを掲示
バナー画像	学会webサイトなどへのリンクを目立たせる
ダウンロードファイル	投稿者向けの原稿テンプレートなど、関連ファイルのダウンロードリンクを表示

表1 「発行機関からのお知らせ」利用例

☆「資料トップ」のカスタマイズ項目

- おすすめ記事：ヘッダーの直下の目立つ位置に、記事を最大5件までピックアップして掲示できます。画像や編集部コメントなどを付加できるので、記事の訴求力向上が期待できます。

☆「この資料について」のカスタマイズ項目

- 資料の説明：資料の沿革や特徴などを自由に記述することができます。ここに記載された文章の冒頭部は、ヘッダーの資料名の直下にも表示されます。
- 編集委員一覧：編集委員の氏名、所属、編集委員会における役割を掲示できます。顔写真の掲載も可能です。



図1 サイト編集ツールの使用前後の例

この他にもカスタマイズ可能な項目があります。詳細および操作方法は『J-STAGE操作マニュアル サイト編集ツール編』([https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/jstage_sousa\(saitohenshu\).pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/static/files/ja/jstage_sousa(saitohenshu).pdf)) をご覧ください。

本件に関する質問等は下記までお問い合わせください。
 JST（科学技術振興機構）情報基盤事業部 J-STAGEセンター
 メールアドレス：center@jstage.jst.go.jp



<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja>

◆JST公式Twitter (@JST_info)

JSTからのプレスリリース・募集案内・イベント情報などをお届けします。

https://twitter.com/JST_info

◆J-STAGE公式Twitter (@jstage_ej)

J-STAGEのメンテナンスやイベントに関する情報などをお届けします。

https://twitter.com/jstage_ej

ぜひ、フォローしてください！

J-STAGEニュース No.50 2022年7月15日発行

編集発行：国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）

情報基盤事業部 研究成果情報グループ

〒102-8666

東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ

E-MAIL : contact@jstage.jst.go.jp

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja>

©2022 Japan Science and Technology Agency